愛媛大学教育学部紀要　第60巻　175 ～ 183　2013

総合型地域スポーツクラブの公共性に関する実証的研究

（保健体育研究室）堺　賢治
（保健体育研究室）藤原　誠
（ＮＰＯ法人 今治しまなみスポーツクラブ）伊賀上哲旭
（環太平洋短期大学部）浅野幹也

A Practical Study on the Publicness of Comprehensive Community Sports Clubs

Kenji SAKAI, Makoto FUJIWARA, Tetsuaki IGAUE and Mikiya ASANO

（平成２５年７月２４日受理）

Ⅰ．序論

2010 年の「スポーツ立国戦略」[1] や 2011 年の「スポーツ基本法」[2] によってわが国のスポーツ界が変わろうとしている。しかしながら、ドイツのスポーツ政策に比べれば雲泥の差がみられる。1960 年のドイツのゴールデンプランでは、15 年間にスポーツ予算１兆 7000 億円を組み、地域のスポーツクラブ加入率を 6.7 %から 1999 年には 28.8 %までに高めた。また、ヨーロッパ諸国では、1975 年「ヨーロッパみんなのスポーツ憲章」を策定した。その１条には「すべての人は、スポーツを行う権利を持つ」、２条には「スポーツは、人類の発展の重要なファクターとして奨励され、公共の投資が行われなければならない」となっており、このことがヨーロッパ諸国の地域スポーツを推進していった。しかしながら、2013 年の文科省の予算は 243 億円であり、その中でも生涯スポーツの予算は約１割であり、経済大国の日本にとってあまりにも少なすぎる。財政的裏付けのない法律は、絵に描いた餅になりかねない。日本は今多額の負債を抱え、今までのやり方では、行政が予算を支出するとは思われない。

そこで、総合型地域スポーツクラブが 2000 年に策定された「スポーツ振興基本計画」[3] どおり実現するためにはスポーツの持つ公共性についてより掘り下げなければならない。総合型地域スポーツクラブの持つ公共性には三つの機能（教育的機能・経済的機能・社会的機能）がある[4]。これらが実証されれば、金を出しても総合型地域スポーツクラブを設立する必要性が証明できる。

教育的機能としては子どもたちの健全育成である。今の子どもたちは遊びにおいて昔のような異年齢集団がなく、スポーツ少年団は大人に管理されたスポーツ活動であり、リーダーが出てこない。総合型地域スポーツクラブによって異年齢の遊び集団を作り、大人に管理されたスポーツ少年団を子どもの手に戻すことで、人間関係能力やリーダーシップ能力を高めることができる[5][6]。経済的機能としては医療費の削減である。超高齢化社会をむかえる日本にとって、スポーツによる健康づくりは緊急の課題である。社会的機能としては地域づくりある。無縁社会といわれている日本にとって地域スポーツによるコミュニティ形成は重要である。

総合型地域スポーツクラブの過去の研究を振り返ると、教育的機能[5][6]・経済的機能[7][8][9][10]・社会的機能[11][12][13][14] について、一つだけ証明した研究はあるが、三つとも網羅された研究はなされていない。これを実証すれば、スポーツの持つ公共性が明確になり、国や地方公共団体に経済的援助を求めることができる。そうなれば、経済的援助をともなった政策が実現でき、スポーツ立国戦略やスポーツ基本法が実現できる。そのことができれば、総合型地域スポーツクラブは日本を救うことができる。

そこで本研究では、2001 年に設立された、山口県岩

国市由宇町の「ＮＰＯ法人ゆうスポーツクラブ」を取り上げ、総合型地域スポーツクラブの持つ公共性について実証することを目的にした。

Ⅱ．調査方法

（１）調査対象：山口県岩国市由宇町在住の 20 歳以上の成人 1,742 名

（２）調査時期：2012 年９月

（３）調査方法：質問紙による配票調査

（４）回収率　：有効回収数　871 部　　有効回収率 50.0 %

（５）分析の視点

①性別

男性　（N＝287　33.0 %）

女性　（N＝584　67.0 %）

②ゆうスポーツクラブ加入の有無

会員　　（N＝409　47.0 %）

非会員　（N＝462　53.0 %）

Ⅲ．結果及び考察

1. 属性

（１）年齢

表１は年齢についてあらわしたものである。全体では、「40 歳代」25.5 %、「30 歳代」24.1 %、「60 歳代」17.8 %が多い。性別で比較すると、男性は「70 歳代以上」が多く、女性は「30 歳代」が多い。

加入の有無別に比較すると、会員は 60 歳代以上の人が多く、非会員は 40 歳代未満の人が多い。

表1　年齢　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
20 歳代	5.2	8.4	19.3	42.1	7.3
30 歳代	18.5	26.3			24.1
40 歳代	24.5	26.0	19.3	31.0	25.5
50 歳代	16.7	7.7	13.9	7.8	10.7
60 歳代	15.0	19.2	29.1	7.8	17.8
70 歳代	20.2	11.8	18.3	11.3	14.6
		P<0.001		P<0.001	

左：男性・女性の有意差／右：会員・非会員の有意差

（２）居住歴

表２は居住歴について示したものである。全体では、「2000（平成 12）年から」が 31.4 %と最も多く、次いで、「1990（平成２）年から」の 21.5 %、「1980（昭和 55）年から」の 16.4 %と続いている。性別で比較すると、男性は 1960（昭和 30）年以前から居住している人が多く、女性は 1990（平成２）年以降から居住している人が多い。

加入の有無別に比較すると、会員は 1960（昭和 35）年以前から居住している人が多く、非会員は 2000（平成 12）年以降から居住している人が多い。

表2　居住歴　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
1959 年以前	19.2	8.7	14.7	10.0	12.2
1960 年から	7.7	4.1	9.0	1.9	5.3
1970 年から	13.6	13.0	15.2	11.5	13.2
1980 年から	17.1	16.1	20.3	13.0	16.4
1990 年から	16.4	24.0	20.3	22.5	21.5
2000 年から	26.0	34.1	20.5	41.1	31.4
		P<0.001		P<0.001	

2. スポーツ活動

（１）種目

表３は現在行っているスポーツ種目についてあらわしたものである。全体では、「散歩・ウオーキング」が 30.1 %と最も多く、次いで、「軽い体操」の 8.3 %、「野球・ソフトボール」の 7.6 %、「ストレッチ」の 7.1 %、「筋力トレーニング」の 6.4 %、「エアロビクス」の 5.6 %、「グラウンドゴルフ」の 5.5 %、「卓球」の 5.3 %、「ダンス」の 4.8 %、「ジョギング」の 4.6 %、「ソフトバレー」の 4.5 %と続いている。「散歩・ウオーキング」や「軽い体操」などの健康志向の種目に人気が集まっていることがわかる。性別で比較すると、男性は「野球・ソフトボール」「筋力トレーニング」「グラウンドゴルフ」「ジョギング」と回答した人が多く、女性は「軽い体操」「ストレッチ」「エアロビクス」と回答した人が多い。男性は球技や運動強度がある種目を実施する人が多く、女性は手軽にできる健康志向の種目に人気があることがわかる。

加入の有無別に比較すると、会員は非会員よりも「野球・ソフトボール」「エアロビクス」「グラウンドゴルフ」「卓球」「ソフトバレー」が多い。その理由として、これらの種目は、ゆうスポーツクラブで行われている教室があるためだと思われる。

表3　種目　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
散歩・ウォーキング	30.7	29.8	35.5	25.3	30.1
軽い体操	4.5	10.1	4.9	11.3	8.3
野球・ソフトボール	22.0	7.4	14.2	1.7	7.6
ストレッチ	4.2	8.6	7.1	7.1	7.1
筋力トレーニング	11.5	4.5	8.8	4.3	6.4
エアロビクス	0.0	8.4	11.2	0.6	5.6
グラウンドゴルフ	11.5	2.6	11.2	0.4	5.5
卓球	5.9	5.1	9.8	1.3	5.3
ダンス	1.7	6.3	7.6	2.4	4.8
ジョギング	10.5	1.7	5.4	3.9	4.6
ソフトバレー	1.4	6.0	8.8	0.6	4.5
ゴルフ	9.8	0.5	3.7	3.5	3.6

（２つまで○印）

（２）頻度

表４はスポーツ活動の実施頻度を示したものである。全体では、「週３回以上」が 30.2 %、「週１～２回」が 34.2 %であり、３分の２の人が週１回以上のスポーツ活動を実施している。性別で比較すると、「週３回以上」実施している人は、男性が 39.0 %、女性が 25.9 %であり、男性の方がよく実施している。

加入の有無別に比較すると、週１回以上実施している人は、会員 86.8 %、非会員 44.1 %であり、会員の方が実施頻度が高い。

表4　頻度　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
週３回以上	39.0	25.9	44.5	17.5	30.2
週１～２回	30.0	35.9	42.3	26.6	34.0
月１～２回	13.2	5.8	7.8	8.7	8.3
年数回	6.3	2.9	3.7	4.3	4.0
行っていない	11.5	29.5	1.7	42.9	23.5
		P<0.001		P<0.001	

（３）施設

表５はスポーツの実施場所を示したものである。全体では、「公共スポーツ施設」の 58.8 %が最も多く、次いで、「道路」の 25.5 %、「学校の体育施設」の 9.4 %と続いており、公共スポーツ施設の占める割合が高い。性別で比較すると、男性は「公共スポーツ施設」と回答した人が多く、女性は「道路」と回答した人が多い。

加入の有無別に比較すると、「公共スポーツ施設」と回答した人は、会員 79.6 %、非会員 22.7 %であり、会員の方が多くなっている。一方、「道路」と回答した人は、会員 17.2 %、非会員 36.0 %であり、非会員が多い。

表5　施設　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
公共スポーツ施設	60.2	57.9	79.6	22.7	58.8
学校の体育施設	10.2	9.4	11.2	6.8	9.8
公園・空き地	5.9	5.4	3.2	8.7	5.6
商業スポーツ施設	8.7	4.6	5.2	7.2	6.2
職場スポーツ施設	5.9	3.1	2.5	6.4	4.2
道路	24.4	26.3	17.4	36.0	25.5
野外（海･山･川）	9.1	6.6	6.7	8.3	7.6
その他	7.1	15.1	4.2	22.7	11.9

（２つまで○印）

3．スポーツのもつ公共性

（１）教育的機能

①スポーツ活動の変化

表６はゆうスポーツクラブができて、子どものスポーツ活動の変化をあらわしたものである。全体では、「そう思う」29.5 %と「まあそう思う」52.0 %を合計すると、81.5 %であり、ゆうスポーツクラブが子どものスポーツ活動に大きな影響を与えていることがわかる。性別で比較すると、差はみられない。

加入の有無別に比較すると、「そう思う」と回答した人は、会員 35.9 %、非会員 23.8 %であり、会員が多い。その理由として、会員は公共スポーツ施設をよく利用するため施設でスポーツをする子どもたちをよく見ているからだと思われる。

表6　スポーツ活動の変化　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
そう思う	30.3	29.5	35.9	23.8	29.5
まあそう思う	51.9	52.0	50.9	53.0	52.0
あまり思わない	17.8	18.5	13.2	23.2	18.5
	n.s.		P<0.001		

②マナーの変化

表７はゆうスポーツクラブが出来て、子どもたちのマナー（挨拶や礼儀作法）の変化を示したものである。全体では、「そう思う」19.3 %と「まあそう思う」49.7 %を合わせると 68.9 %であり、約７割の人が、子どもたちが挨拶をしたり、礼儀正しくなったと感じている。性別で比較すると、男性は「そう思う」と「まあそう思う」を合わせると 75.6 %、一方、女性は 65.8 %であり、男性の方がマナーの変化を指摘する人が多い。

加入の有無別に比較すると、会員は「そう思う」と「まあそう思う」を合わせると 81.4 %であり、一方、非会員は 58.0 %であり、会員の方が多い。

表7　マナーの変化　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
そう思う	20.2	18.8	23.5	15.6	19.3
まあそう思う	55.4	46.9	57.9	42.4	49.7
あまり思わない	24.4	34.2	18.6	42.0	31.0
	P<0.05		P<0.001		

ゆうスポーツクラブが出来て、スポーツ活動が盛んになることやスポーツのもたらす「しつけ教育」は子どもたちを変えていく。別の言葉で言えば、社会教育の充実である。地域がしっかりし、子どもたちを地域で育てようとする姿勢は、地域共同体が過去に果たしていた機能を取り戻すことになる。その結果、スポーツの持つ教育的機能は実現出来るものと思われる。

（２）経済的機能

①健康への自信

表８は自分の健康について自信があるかについてあらわしたものである。全体では、「自信がある」15.5 %と「どちらかといえば自信がある」35.3 %を合計すると 50.8 %であり、約半数の人が自分の健康に自信があることがわかる。性別で比較すると、「自信がある」と「どちらかというと自信がある」と回答した人は、男性 58.9 %、女性 46.8 %であり、男性の方が女性より自分の健康に自信を持っている人が多い。

加入の有無別に比較すると、「自信がある」と「どちらかといえば自信がある」と回答した人は、会員 62.3 %、非会員 40.5 %であり、会員の方が非会員よりも自分の健康に自信のある人が多い。

表8　健康への自信　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
自信がある	18.1	14.2	20.8	10.8	15.5
どちらかといえば自信がある	40.8	32.6	41.5	29.7	35.3
どちらでもない	28.2	31.3	25.7	34.4	30.3
どちらかといえば自信がない	8.4	15.6	8.3	17.5	13.2
自信がない	4.5	6.3	3.7	7.6	5.7
	P<0.01		P<0.001		

②健康状態の変化

表９はゆうスポーツクラブに加入してからの健康状態の変化を示したものである。全体では、「良くなった」21.2 %と「少し良くなった」30.6 %をあわせると 51.7 %であり、約半数の人が良くなったと感じている。性別で比較すると、「良くなった」と回答した人は、男性 16.7 %、女性 23.7%であり、やや女性の方が良くなったと感じている。

表9　健康状態の変化　（%）

項目	男性	女性	合計
良くなった	16.7	23.7	21.1
少し良くなった	30.4	30.7	30.6
変化なし	50.4	42.4	45.4
少し悪くなった	2.0	2.0	2.0
悪くなった	0.5	1.2	0.9
		P<0.001	

スポーツ活動を昔から継続的にしている人は健康状態の変化はあまりみられないが、継続的にしていない人が定期的なスポーツ活動をすると健康状態が良くなることがよくみられる。良くなったと指摘する人を合わせると、スポーツ活動による医療費の削減という総合型地域スポーツクラブの経済的機能は果たせているものと思われる。

（３）社会的機能

①地域活動の変化

表 10 はゆうスポーツクラブが設立された後の地域活動（文化・スポーツ・ボランティア活動など）の変化をあらわしたものである。全体では、「盛んになった」31.5 ％と「まあ盛んになった」50.0 ％をあわせると 81.5 ％であり、約８割の人が地域活動が盛んになったと感じている。性別で比較するとあまり差はみられない。

加入の有無別に比較すると、「盛んになった」と回答した人は、会員 37.7 ％、非会員 26.0 ％であり、会員の方が盛んになったと感じている。

表10　地域活動の変化　（%）

項目	男性	女性	会員	非会員	合計
盛んになった	33.4	30.5	37.7	26.0	31.5
まあ盛んになった	52.0	49.1	51.3	48.9	50.0
変わらない	14.6	20.4	11.0	25.1	18.5
		n.s.		P<0.001	

②コミュニティ意識

鈴木広 [15] はコミュニティ意識をコミュニティ・モラールとコミュニティ・ノルムに分けているが、本稿ではコミュニティ・モラールからみていく。

コミュニティ・モラールはコミュニティに関する関与の程度を知るための概念装置である。したがって、コミュニティ・モラールが高いほど、コミュニティ形成にとって望ましいといえる。また、コミュニティ・モラールは感情、統合認知、参加意欲の三要素からなっている。

感情とは、人々のコミュニティへの感情的・情緒的関わりを意味し、安堵感、同一視、仲間意識、好き嫌いの感情などからなるものである。統合認知とは、コミュニティのまとまり、リーダー、相互扶助、団結心について人々の認知をあらわすものである。参加意欲とは、人々のコミュニティへの参加意欲や関与を意味し、コミュニティ活動、地方政治、コミュニティの行事への参加や関心の度合いなどからなるものである。

コミュニティ・モラールに関する質問文については次のような内容である。

感情

１．安堵感：外出してこの町に帰ってきたときに、「自分の町に帰ってきた」と感じてホッとしていますか。

２．同一視：人からこの地域の悪口を言われたら、何か自分の悪口を言われたような気になりますか。

３．仲間意識：この町に住んでいる人たちはみんな仲間だという気がしますか。

４．好き嫌い：この町（地域）が好きですか。

統合認知

１．まとまり：この町の人たちはまとまりはよい方ですか。

２．リーダー：この地区のリーダーたち（町内会とか婦人会、ＰＴＡなどの役員など）はがいして地域のためによくやっていると思いますか。

３．相互扶助：この地区に住んでいるみんなは、お互いに何かと世話しあっていますか。

４．団結心：この町に住んでいる人たちはお互いに協力気持（団結心）が強い方だと思いますか。

参加意欲

１．役割意識：この町のためになることをして何か役に立ちたいと思いますか。

２．地方政治：この町や校区を代表する市会議員を出すことは大切だと思いますか。

３．地域行事への参加：町内や校区で一緒にする行事（運動会、寄付、掃除、署名活動など）にあなたは参加する方ですか。

４．行事関心：町内、校区内でするいろいろなこと（役員改選、年中行事、建設、道路事業など）にあなたは参加する方ですか。

そして、これらの質問に対してはすべて五段階にランクづけされた回答、例えば、「この町（地域）が好きですか」に対しては、①非常に好き、②やや好き、③どちらでもない、④やや嫌い、⑤非常に嫌い、などを用意した。

表 11 ～表 22 は、感情（安堵感、同一視、仲間意識、好き嫌い）、統合認知（まとまり、リーダー、相互扶助、団結心）、参加意欲（役割意識、地方政治、地域行事への参加、行事参加）をあらわしたものである。

コミュニティ意識の形成について有意な差がみられたのは、感情の安堵感、仲間意識、好き嫌い、統合認知の相互扶助、団結心、参加意欲の役割意識、地方政治、行事関心である。

表11　安堵感　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	34.7	28.6	31.5
まあよい	45.9	42.6	44.2
どちらともいえない	15.2	20.6	18.0
やや悪い	3.2	6.3	4.8
非常に悪い	1.0	1.9	1.5

P<0.05

表12　同一視　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	13.9	7.1	10.3
まあよい	42.9	37.2	39.9
どちらともいえない	35.7	41.2	38.6
やや悪い	6.8	10.6	8.8
非常に悪い	0.7	3.9	2.4

n.s.

表13　仲間意識　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	24.4	14.5	19.2
まあよい	50.1	48.9	49.5
どちらともいえない	22.2	28.8	25.7
やや悪い	2.4	6.3	4.5
非常に悪い	0.7	1.5	1.1

P<0.001

表14　好き嫌い　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	17.4	14.5	15.8
まあよい	53.8	46.5	50.0
どちらともいえない	24.7	32.5	28.8
やや悪い	3.4	5.2	4.4
非常に悪い	0.7	1.3	1.0

P<0.01

表15　まとまり　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	18.8	19.3	19.1
まあよい	54.5	53.0	53.6
どちらともいえない	24.4	24.5	24.5
やや悪い	1.7	2.6	2.2
非常に悪い	0.5	0.6	0.6

n.s.

表16　リーダー　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	34.7	28.6	31.5
まあよい	45.9	42.6	44.2
どちらともいえない	15.2	20.6	18.0
やや悪い	3.2	6.3	4.8
非常に悪い	1.0	1.9	1.5

n.s.

表17　相互扶助　（%）

項目	会員	非会員	全体
非常によい	10.8	8.7	9.6
まあよい	49.6	41.8	45.5
どちらともいえない	35.7	43.9	40.1
やや悪い	3.7	4.5	4.1
非常に悪い	0.2	1.1	0.7

P<0.05

表18　団結心　(%)

項目	会員	非会員	全体
非常によい	15.4	7.4	11.1
まあよい	48.2	43.9	46.0
どちらともいえない	29.6	36.8	33.4
やや悪い	5.6	9.7	7.8
非常に悪い	1.2	2.2	1.7

P<0.05

表19　役割意識　(%)

項目	会員	非会員	全体
非常によい	34.7	27.1	30.7
まあよい	42.3	40.3	41.2
どちらともいえない	17.6	25.8	21.9
やや悪い	3.9	5.8	4.9
非常に悪い	1.5	1.1	1.3

P<0.001

表20　地域政治　(%)

項目	会員	非会員	全体
非常によい	25.4	27.3	26.4
まあよい	47.4	45.2	46.3
どちらともいえない	18.1	18.2	18.1
やや悪い	4.2	5.8	5.1
非常に悪い	4.9	3.5	4.1

P<0.05

表21　地域行事への参加　(%)

項目	会員	非会員	全体
非常によい	43.3	31.6	37.1
まあよい	43.5	49.0	46.4
どちらともいえない	11.5	16.7	14.2
やや悪い	1.5	2.4	2.0
非常に悪い	0.2	0.4	0.3

n.s.

表22　行事関心　(%)

項目	会員	非会員	全体
非常によい	15.4	7.4	11.1
まあよい	48.2	43.9	46.0
どちらともいえない	29.6	36.8	33.4
やや悪い	5.6	9.7	7.8
非常に悪い	1.2	2.2	1.7

P<0.001

表23　クラブ加入の有無からみたコミュニティ意識

項目	感情					統合認知					参加意欲				
	2	1	0	−1	−2	2	1	0	−1	−2	2	1	0	−1	−2
会員	27.0	43.9	21.8	5.8	1.5	14.5	54.1	28.3	2.7	0.4	25.0	47.0	21.9	4.0	2.1
非会員	19.8	43.9	26.6	7.3	2.4	12.9	48.3	33.9	4.0	0.9	19.1	44.5	27.4	6.9	2.1
全体	23.2	43.9	24.3	6.6	2.0	13.6	51.0	31.3	3.4	0.7	21.9	45.6	24.8	5.6	2.1

表 23 は、感情、統合認知、参加意欲のそれぞれ４つの調査内容を点数化（＋２、＋１、０、－１、－２）し、まとめてその平均を出したものである。＋２、＋１に注目すると、感情、統合認知、参加意欲のどれにおいても会員のどれにおいても会員の人の方が高い値を示している。

全体をまとめると、感情、統合認知、参加意欲、いずれの項目も会員の方が高い値を示している。特に、感情と参加意欲では差がみられた。会員は、スポーツクラブに加入し、クラブ活動を通して、クラブ員の人間関係ができ、地域の各種行事に参加することによって、コミュニティ意識が高まってくる。これらもことによって、コミュニティ形成に寄与するものと思われる。

以上のことから、総合型地域スポーツクラブは地域づくりという社会的機能を果たしているといえる。

Ⅳ．結論

（１）現在行っているスポーツ活動では、「散歩・ウオーキング」「軽い体操」などの健康種目に人気があり、約６割の人が週１回以上の頻度でスポーツ活動を実施している。週１回以上の実施頻度はクラブ会員の方が非会員に比べて高く、スポーツ活動の場所について、クラブ会員は「公共スポーツ施設」が多く、非会員は「道路」が多い。クラブ会員は、クラブによって定期的に運動を行う機会と場所を得ており、クラブを中心にスポーツ活動を行っている。

（２）総合型地域スポーツクラブの公共性として、教育的機能は、クラブ設立後スポーツ活動が盛んになったことや、子どもの道徳性が心配されている昨今、子どもたちのマナーが良くなったことである。経済的機能としては、クラブに加入すると、自分に合ったスポーツを定期的に行うことにより、健康になったと感じる人が多く、医療費の削減につながると思われる。社会的機能としては、クラブに加入することで、教室やクラブのイベントに参加することで地域との関係を深め、コミュニティ意識が高まり、地域におけるコミュニティ形成に寄与している。総合型地域スポーツクラブの三つの公共性が実証されたことは、日本における今後の総合型地域スポーツクラブの設立・育成に多大なる貢献を果たすものと思われる。

参考文献

１）文部科学省（2010）「スポーツ立国戦略」
２）文部科学省（2011）「スポーツ基本法」
３）文部省（2000）「スポーツ振興基本計画」
４）堺賢治（2006）「総合型地域スポーツクラブの必要性」　愛媛大学教育学部紀要　第５号　pp.41-45
５）堺賢治・藤原誠・伊賀上哲旭・山本孔一（2007）「子どもの遊びとリーダーシップに関する研究ースポーツクラブ学校生活を中心にしてー」　愛媛大学教育学部紀要　第 54 号　pp.161-167
６）堺賢治・藤原誠・伊賀上哲旭（2010）「子どもの学校生活場面のリーダーシップに関する研究ー遊びとスポーツクラブ、体育との関係ー」愛媛大学教育学部紀要　第 57 巻　pp.161-167
７）堺賢治「スポーツー地域スポーツー」（1996）星島一夫・永井鞆江編著『生活文化を拓く』　啓文社　pp.124-126
８）堺賢治「コミュニティのスポーツ集団ーチームからクラブづくりの可能性ー」（1988）三好喬・團琢磨・荒井貞光編著『スポーツ集団と選手づくりの社会学』　道和書院　p.101-118
９）水上博司・大平利久（2007）「地域スポーツクラブ会員の運動頻度の増加からみた医療経済効果」　日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要　第 74 号 pp.161-178
10）水上博司・大平利久（2011）「地域スポーツクラブ会員の運動頻度の増加からみた医療経済効果（２）」日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要　第 81 号 pp.61-79
11）堺賢治・藤原誠（1988）「農村におけるコミュニティ活動によるコミュニティ意識の形成に関する研究ー趣味・学習、スポーツ、奉仕活動の比較からー」　愛媛大学教育学部保健体育学教室論集　第７号　pp.27-35
12）堺賢治（1989）「公民館分館のスポーツ活動に関する研究ー地域スポーツ行事参加者と不参加者の比較ー」愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第 35 巻　pp.125-136
13）堺賢治（1991）「農村における青年のスポーツ活動

とコミュニティ活動に関する研究ースポーツクラブ・青年団加入者と未加入者の比較ー」　愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第 38 巻　第 1 号　pp.195-208
14）堺賢治・藤原誠・伊賀上哲旭・山本孔一（2006）「総合型地域スポーツクラブ育成のための住民調査（２）ー愛媛県松山市しおみクラブの場合ー」　愛媛大学教育学部紀要　第 53 巻　pp.97-106
15）鈴木広編(1978)「コミュニティ･モラールと社会移動の研究」アカデミア出版